

典型色に対する潜在意識と記憶の関係

金沢大学電子情報学類情報システムコース 3 年 233 番 建部直人

1.はじめに

対象の認知における色の効果について、Naor-Raz,Tarr,&Kersten (2003)は、対象物（例えばバナナ）に典型色をつけて提示する方が非典型色をつけて提示する場合よりも、対象の再認が速く行われることを報告している。

本研究では、単語の再認においても典型色の促進効果が見られるかどうかを検討するために、単語が意味する対象の典型色で提示する条件と非典型色で提示する条件を設定した。

2.実験内容

(1) 実験 1

色付きの単語を PC で提示し、1 分 30 秒で記憶できるだけ記憶してもらう。その後、変化の見落とし課題を提示し色に対して敏感かどうかを調査した。変化の見落とし課題が終了次第、先ほど記憶した単語を再生させる。

(2) 実験 2

1～30 までの数字が書かれた黒い正方形を順番にクリックし、正しい順番でクリックすると、クリックした正方形の色が変わり、その中に色付きの単語が提示されるという実験をする。終了次第、変化の見落とし課題を行い、単語の再生をさせる。実験 2 では実験 1 とは違い、単語の記憶をするようには促さず、潜在意識下での記憶を調査した。

3.実験結果

(1) 実験 1

記憶した単語により典型色優位群と典型色非優位群に分類し、変化の見落とし課題にかかる時間の関係を調査した。その結果が図 1 である。

これに対して分散分析を行うと $F[1, 9] = 2.065$, $p =$

0.1887 となり、被験者が少ないことを考慮すると有意傾向があると言える。これより、変化の発見が速い被験者(=色に敏感な被験者)は典型色だけでなく非典型色にも注意が向くことがわかる。

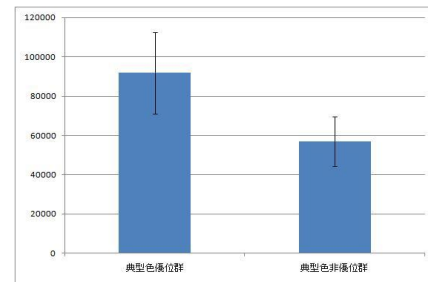


図 1 変化発見の平均時間[ms]

(2) 実験 2

典型性と単語数の関係を調査した結果が図 2 である。これに対し分散分析を行ったところ $F[1, 9] = 16.568$, $p = 0.0028$ となり、有意性があつた。これより、潜在意識下では典型色提示の方が記憶しやすいことがわかる。

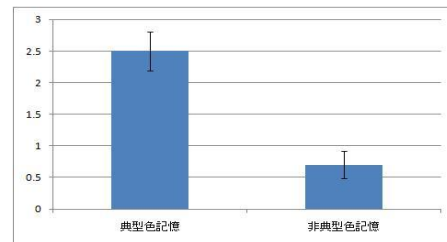


図 2 典型性と記憶した単語数

4.考察

実験 1 より、変化発見時間が短い人は非典型色にも注意が向くことがわかる。色の変化に敏感な人を探す時などは非典型色提示することにより対象を絞れるだろう。実験 2 より、潜在意識下では典型色提示の方が記憶に残りやすいことがわかる。TV の CM などの瞬間的にしか見えないものは典型色提示の方が印象に残りやすい。